

# 研究ノート 京城図書館の設立と 利用状況についての一考察

奥 田 浩 司

## 1. 京城図書館

京城図書館は、三・一独立運動後の京城に朝鮮人の手によって設立された私設の公共図書館である。日本の植民地政策は、三・一独立運動を契機として変更され、武断統治から文化統治へと大きく舵が切られることになる。武断統治下の植民地朝鮮では「愚民文化教育政策」<sup>1</sup>がとられ、朝鮮人が図書館を設立することはできなかった。しかし、文化統治によって図書館を設立することが可能となる。このような三・一独立運動後における植民地朝鮮の状況下において、京城図書館は設立にいたったのである。

京城図書館の設立について、『日本の植民地図書館 アジアにおける日本近代図書館史』では次のように説明している。

図書館の中でも、尹益善がソウルに設立した京城図書館(一九二〇年一月五日)は、朝鮮人による朝鮮人のための公開図書館で、開館時の蔵書数が三万五〇〇〇冊もあったほど、規模の大きな図書館であった。約一年後に、李範昇がやはり京城図書館の名称で図書館を設立し(一九二一年九月一〇日)、先の尹益善の京城図書館をも分館として引き受けて運営した。<sup>2</sup>

説明されているように、京城図書館は、「朝鮮人のため」に設立された図書館である。留意しておきたいのは、植民地朝鮮では、図書館の利用者が強く意識される状況にあったことである。植民地朝鮮の中心であった京城には、朝鮮人と日本人が共に暮らしていたわけであるが、京城図書館は「朝鮮人」が利用するであろうことを前提にして設立されたのである。

では、朝鮮人にとって京城図書館にはどのような意義があったのであろうか。本研究ノートは、このような問題意識の下に、京城図書館について調査をした資料ノートである。

調査をするにあたって、参照した先行論文は宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究 一開化期から1920年代まで一」<sup>3</sup>である。宇治郷は、論文題に示されているように、開化期から1920年代までの韓国における公共図書館の歴史について、同時代資料を踏まえつつ詳細に論じており大変参考になる。本研究ノートは、宇治郷論文で示された資料

(2)

を参照して検討を加えたものである。

## 2. 李範昇

宇治郷論文が引用している資料の一つに、『京城彙報』第11号<sup>4</sup>に掲載された李範昇「京城図書館と私」がある。これから李範昇「京城図書館と私」について検討していきたいのであるが、その前に記事が掲載された『京城彙報』について見ておく。

管見の及ぶ限りではあるが、『京城彙報』について言及した論文は次の二つの論文である。石田潤一郎「名都「京城」の夢：「京城市街地計画」の植民地的特質に関する考察」では、『京城彙報』について「府の広報誌」<sup>5</sup>とし、都市計画に関する記事から引用している。また、鄭忠實「1920年代—1930年代、京城の映画館：映画館同士の関係性を中心に」<sup>6</sup>では、日本語能力のある朝鮮人の人数について、『京城彙報』を参照して示している。先行研究に見られるように『京城彙報』からは、「京城府」について、あるいは朝鮮在住の朝鮮人及び日本人の状況について知見を得ることができる。奥付を確認すると、「発行所」は「京城府」となっており、石田論文にあるように、ひとまず京城府の広報誌として位置づけることができるのではないだろうか。

これから検討していくように、李範昇「京城図書館と私」は京城図書館の成り立ちを知る上で貴重な資料となっている。宗主国側の広報誌に掲載された記事であることを前提としておく必要があるものの、この記事から京城図書館について様々なことを読み取ることができる。

記事の執筆者である李範昇につて、宇治郷は次のように紹介している。

李範昇 (1887 ~ 1976)。忠清南道出身。1917年7月、京都帝大法科大学独法科卒業。1917年9月より1919年7月まで、京都帝大大学院在学、法制史及び朝鮮法制史を研究。1918年9月南満州鉄道株式会社職員となるが、1920年6月退社。1921年9月、京城図書館創立。1923年4月、法学専門学校講師を嘱託される。1926年9月、朝鮮総督府殖産局農務課に勤務するが、1930年離職。解放後の1945年9月、初代ソウル市長となる。国会議員も歴任。1964年、韓国図書館協会から表彰される。1971年9月、ソウル特別市立鐘路図書館前庭に「李範昇先生銅像」が建立された。<sup>7</sup>

宇治郷によれば、李範昇は、宗主国日本との接点を持ちながら、植民地朝鮮における図書館の設立に尽力した知識人であり、「解放後」には政治家として活躍している。李範昇が植民地朝鮮における注目すべき知識人の一人であることは確かなことではないだろうか。

### 3. 李範昇「京城図書館と私」

宇治郷論文では、李範昇「京城図書館と私」を参照・引用しつつ、留学から満鉄社員時代にかけての活動について次のように述べている。

実際の図書館設立のためにも、彼は活動した。たとえば1918年春、洪沢栄一男爵と児玉秀雄伯爵に面会し、「図書館の必要が朝鮮に於て最も急なる」ことを具申したが協力を得られなかったこと、また翌年、大連の満鉄勤務時代に、泰東日報社長金子雪齋などの協力で図書館設立を企てたが失敗したのがその例である。しかし、この時期の彼の運動は日本人の要人や有志者に働きかけて実現させようとするもので、おのずから限界があった。真に彼の運動が実を結ぶのは、独力で「京城図書館」を設立する1921年9月を待たねばならなかった。<sup>8</sup>

宇治郷が指摘しているように、李範昇は植民地朝鮮に図書館を作ることを急務と考え、何とか設立しようとするが、朝鮮人のための図書館を「日本人」に協力を仰いで設立することには「限界」があった。

この間の事情をより詳しく知るために、宇治郷論文が参照した箇所を、李範昇「京城図書館と私」から引く。

偕而私が図書館を経営したいと思ひましたのは大正五年頃からで其当時は京城に未だ其れ等の事に就き殆んど何等の計画もなかつた様に思はれます此は其当時の当局者の話振りに依つても知る事が出来ます。翌六年大学を卒へてからも初志を貫徹したく図書館事業を研究しつゝ、翌七年初春大学院在学中恩師仁保先生の御指導と御紹介の下に東京にて洪沢男爵及児玉伯に面謁の榮を得、図書館の必要が朝鮮に於て最も急なるを申上げ且御声援を乞ひました処同情厚き御訓諭と御忠言により一時己むを得ず折角の思ひを中止せねばならぬ破目に陥り少なからず悔恨の涙を拭ひ其の後京城日報に李王世子殿下と梨本宮姫殿下御慶事紀念として図書館設立の必要を旬日に互り投書した事も有りました、かくて押へ難き悶々の情に包まれ北野の寒梅も余所目に見て仕舞ひ、祇園の夜桜も物哀れに眺めて研究も怠りがりでありました、幾度か心に鞭ちますもの、励みました心は三日と続かない、怎うなる事かと自分ながら憂ひました際、幸か不幸か戦時の景気に伴れて日々に騰貴する物価は二十五円の奨学金では一ヶ月の宿も払えないやうになり又大学院在学一ケ年後は自由に何処かの地にても研究するを許されますので仁保先生に願ひ満鉄に職の口を求めて頂き満州にて派離する同胞の為に一働きする覚悟で大連に落ち延びたのは丁度其の年の九月の末でした、京都を發つ時は単衣尚暑い位でしたのに大連は既に綿衣の恋しい程寒い、過去幾多の失敗の傷を外套に深く包み新なる希望を胸に抱きつゝ、荒海に身を投じて力一杯に在満鮮人状況をも調査し意見書も提出したが今から見れば随分小規模の計画であつたのも其の時は其れ

さへ顧みられなかつた兎角事と心と相違へる一方で味気なく其の日暮に嘗々として生れて初めて腰弁になり澄ましては居たが全く思ひ切れない図書館事業が又も恋々と頭を擡げてあました当時幸ひ泰東日報社長金子雪齋翁上田満鉄秘書及其他隠れたる同情者の多大なる声援により累々有望になり掛けましたが又も思ひがけない財界の打撃に依り予定の計画に大なる変更を加へなければならぬやうになりまして失望を繰返す悲哀に涙を搾りましたけれども今度は断然予定の行動に進む決心で拾六年目に初めて旅装を故郷に解き新聞雑誌縦覧所の如きものでも始め度いと苦心した処同志方奎煥君も多く同情を表し殊に久保京管局長は身に余る程の御同情を賜り美濃部鮮銀総裁及守屋秘書課長も懇切なる御同情を表せられる為物質上及精神上に幾多の援助を蒙りて今の京城図書館が生れたのであります私が図書館を思ひ立つてから種々の障碍と困難と戦いつつ、六ケ年と云ふ長年月を経て漸く宿志の一部を達した理由であります。(傍線引用者)

注目しておきたいところに傍線を付した。李範昇は、日本での活動は実らず、満鉄職員として大連に渡る。李範昇が大連に渡った後に試みたのは、「在満朝鮮人状況」を調査して意見書を提出することである。李範昇の提出した意見書の内容については、推測でしかないが、在満朝鮮人の生活環境あるいは社会的地位の向上を企図したものではないだろうか。このように見る時、李範昇は留学中から一貫して朝鮮人のために行動していることがわかる。

李範昇は、満州滞在を切り上げて植民地朝鮮に帰るのであるが、そのきっかけとなったのは三・一独立運動の**はず**である。三・一独立運動については『京城彙報』の性格上、言及できるわけではないのであり、李範昇は割愛している。しかしこれから見ていくように、京城図書館の設立に際して、李範昇と連携した朝鮮人は三・一独立運動に深くかかわった人物であり、李範昇が三・一独立運動の趣旨に賛同していたことは疑いを得ない。

#### 4. 尹益善

宇治郷は、李範昇が京城図書館を設立した状況について、「京城図書館と私」を参照・引用しつつ次のように述べている。

尹益善らの図書館が経営難に直面していた時、別個に李範昇による図書館設立が計画され、この二つの図書館が合併するに至った。

李範昇は日本滞在時からの宿題であった図書館を、1921年9月10日、京城府鐘路二街のパゴダ公園横に設立した。この場所は旧韓国軍楽隊が使用していたところで、当時朝鮮総督府の所管となっていたが、無料で借りうけることができた。(略)この時李範昇は尹益善と協議し、両図書館を合併することに合意した。そして鐘路の図書

館を「京城図書館本館」とし、翠雲亭の図書館を「京城図書館分館」とすることに決定した。かくしてこの日は、李範昇にとっては朝鮮民族のための図書館設立という宿願が達成された日であり、また同時に近代韓国図書館史上からみれば、尹益善と李範昇という二人の偉大な図書館人が堅く手を結びあった記念すべき日となった。<sup>9</sup>

京城図書館について整理しておく、まず尹益善らによって設立されるのであるが、経営難から李範昇の設立した図書館と合併し、李範昇が運営することになる。

宇治郷によれば、李範昇と連携した尹益善は「三・一独立運動に直面し、「朝鮮独立新聞」なる地下新聞を発行し、逮捕、投獄され」「獄中で、民族啓蒙のための図書館計画をたて」た人物であった。本館の置かれた「パゴダ公園横」についても考えを及ぼしておく、パゴダ公園は三・一独立運動にゆかりの深い場所である。無論のこと、建物は総督府から借り受けたものであり、その点ではむしろ総督府との結びつきが強い。しかし、それでもなお独立運動との関係がうかがわれるのは、図書館利用者として朝鮮人が想定されていたことによる。朝鮮人が京城図書館に足を運ぶことは、三・一独立運動を想起することでもあったはずである。そのことに、李範昇が意識的ではなかったと考えることはできない。

これらの点を踏まえつつ、本研究ノートでは、尹益善について以下の資料について考察をくわえていく。参照した資料は、『現代史資料 (25) 朝鮮 (一) 三・一運動 (一)』<sup>10</sup>に収められている、「五 三・一運動日次報告 (朝鮮総督府警務局発、一九一九・三～五月)」の「大正八年三月一日 高第五四〇一号 独立運動ニ関スル件 (第二報)」<sup>11</sup>である。「資料解説」によれば、資料の出典は「朝鮮総督府警務局文書」である。<sup>12</sup>

既報二月二十八日夜朝鮮独立宣言書ヲ発見シ、爾來嚴重操作ヲ続行シ三月一日午後五時半頃迄ノ間ニ於テ宣言書署名者三十三名中左記二十九名ヲ逮捕スルニ至リシガ先之京城府内ニ於ケル中学程度以上ノ各官、公、私立学校生徒ハ三月三日举行ノ国葬儀ニ参列セザル旨ヲ決議セシヤノ風説アリシガ其ノ後京城医学専門学校生徒ハ本日全部欠席セシ事実ヲ発見セシヲ以テ嚴重手配警戒中ノ処午後二時半頃、学生三、四千名ハ京城鐘路通ニ集合シ、群集之ニ附和シテ数组ニ分レ一団ハ德寿宮大漢門前ニ至リ韓国独立万歳ヲ高唱シテ一時門内侵入シテ後同門前広場ニ於テ「独立演説」ヲ為シ、一団ハ京城郵便局前ニ於テ「独立万歳」ヲ叫ビ更ニ南大門駅前ヨリ義州通ニ出テ伝国領事館ニ至リ館員ニ対シ独立ノ能否ヲ質問シ、一団ハ昌徳宮門前ニ至リ「独立万歳」ヲ唱へ、一団ハ朝鮮歩兵隊前ニ至リ同営内ニ進入セントシテ阻止セラレ、又大漢門前ノ一団ヨリ分岐セシ一団ハ米国総領事館ニ至リ万歳ヲ唱へ、他ノ一団約三千名ハ総督府ニ向ワムトセシヲ以テ本町通ニ於テ之ヲ阻止セシガ形勢倍重大トナラムトスルノ兆アルヲ以テ竜山軍司令部ト連絡シ、示威ノ目的ヲ以テ歩兵三個中隊騎兵一小隊ヲ市内枢要ノ地ニ配置セシニ午後七時頃ニ至リ学生等ノ示威運動ハ表面鎮静ニ帰セリ。群衆中首

魁者ト認ムヘキ者百三十四名ヲ逮捕シ署名者二十九名ト共ニ取調中。而シテ当部ニ於テ首謀者ノ檢挙ニ着手スルヤ京城普成専門學校長尹益善ナル者ハ「朝鮮独立新聞」ト題スル別紙訳文ノ如キ印刷物ヲ市中ノ群衆ニ配布セシヲ以テ直ニ之ヲ逮捕セリ。(傍線 引用者)

傍線を付したところから、「学生」の大規模な運動のあったことがわかる。それと同時に、尹益善が当時校長職にありながら、「朝鮮独立新聞」を配布していたことも目を引く。尹益善が「学生」の運動と関係を持っていたのかどうかはともかくとして、「学生」に朝鮮独立への期待を抱いていたことは確かなことではないだろうか。

その一方で、尹益善が、「市中ノ群衆」に配布した「印刷物」は、京城図書館について考える上で極めて興味深いものである。引き続き、前掲資料より引く。

## 別紙

### 訳文

朝鮮独立新聞 新聞社長 尹益善

朝鮮民族代表孫秉熙、金秉祚氏外三十一人ハ朝鮮建国四千二百五十二年三月一日午後二時朝鮮独立宣言書ヲ京城太華館内(明月館支店)ニ於テ発表シタルガ同代表諸氏ハ鍾路警察署ニ拘引セラレタリト。

### 代表諸氏ノ信托

朝鮮民族代表諸氏ハ最後ノ一言トシテ同志ニ対シ告ゲテ曰ク、吾人ハ朝鮮ノ為生命ヲ犠牲ニ供スルモノナリ。吾神聖ナル兄弟ハ吾侪ノ素志ヲ貫徹シ、飽ク<sup>ニ</sup>追我ニ千万民族最後ノ一人迄断ジテ乱暴の行動又ハ破壊の行動ニ出ヅルコトアル可カラズ。若シ一人タリトモ乱暴的或ハ破壊的の行動有ルニ於テハ千古救フベカラザルノ朝鮮ト作ルベキヲ以千万注意自重セザルベカラズ。

### 全国民響應

同日代表諸氏ノ拘引セラレタルト同時ニ全国民ハ諸氏ノ素志ヲ貫徹スル為一齊響應スベシト云フ。

朝鮮建国四千二百五十二年三月一日<sup>13</sup>

「一人タリトモ乱暴的或ハ破壊的の行動」に出ることを認めないとあるように、孫秉熙を初めとする「三・一運動指導層」の思想は徹底した非暴力にあってのであり、「平和的であり、非闘争的」<sup>14</sup>であった。暴力によらない独立を目指すのであれば、知的な闘争は必然であり、図書館の設立を目指すことは自然な成り行きであると考えられる。

尹益善ら有志の朝鮮人は、1920年11月5日に京城図書館を設立する。図書館設立の目的について、宇治郷は「朝鮮民族発展のために“知識の発展”と“学者の養成”が必要であるという思想」<sup>15</sup>のあることを指摘している。だとすれば、京城図書館の設立の

背景には、「学生」が書籍から知識を習得し、「学者」へと育っていくことへの期待があったと考えることができるのではないだろうか。

## 5. 日本人の京城図書館から、朝鮮人の京城図書館へ

京城図書館と三・一独立運動の関係について、さらに検討するために、李範昇「京城図書館と私」から引く。

此の京城図書館と云ふ名称は山口精一氏が京城府南米倉町にて経営せられる時に附けた名でありますが財政困難と同氏の或会社の重役に赴任せられたとにより一時は己むを得ず閉館し昨年売却したのを京城の有志等が買取の上、齋洞にある翠雲亭と云ふ貴族会所属の榭亭を借り受け数千円を投じ家屋を修理し器具等も新に購入し書籍等は或は寄附或は蔵書を得て面目一新の上故金允植氏が館長に、尹益善氏が主幹となられ経営の任に当り相当の成績を挙げつゝ、ありましたが経営困難の窮境に瀕してゐる際に、丁度私が新に図書館を現今の本館即パゴダ公園の西隣にある旧洋楽隊の建物を秘書課長長守屋氏の尽力により総督府より無料にて借受け設立する様に成るや相談の上相合し、パゴダ公園の新館を本館に翠雲亭の旧館を分館にしてから京城図書館が大に拡張せられ前よりは余程図書館らしき形体を備へ龍山の満鉄図書館を除いては京城の唯一図書館として一般市民に不十分ながら其の要求に応じつゝ、今日に至りたのでありますが図書館の任務を遂行するには未だ前途遼遠の事と存じます。(傍線 引用者)

京城図書館について、朝鮮人有志が日本人から「買取」して移設したものであると述べられている。名称も蔵書も継続されているのであり、その点で京城図書館は日本と密接な関係を備えているかのような印象が与えられている。だが表面上はともかく、これから検討していくように、内実には変化が見られる。宇治郷論文では次のように述べている。

この図書館設立については、従来、山口精が南米村町で経営していた「京城図書館」を“引き受けたもの”とか“再建したもの”という見方があった。それは両者の館名が同じであったこと、尹益善らが山口精経営の図書館蔵書の大部分を継承した点からくる誤解であった。しかし、この両者はまったく別個の図書館であったと考えられる。なぜなら、蔵書は山口精から経営を委託されていた橋本茂雄、松本政寛らから買取したものであった。またより重要なことは、この両図書館の間に思想面での何らかの継承関係がなかったことである。<sup>16</sup>

尹益善の京城図書館が、名称を継承しただけではなく、蔵書の大部分を引き継いだの

であれば、単に管理者が変わっただけであり、「再建」したという見方が出てきても不思議ではない。

しかし、宇治郷は京城図書館には思想的な断絶があると指摘する。宇治郷のいう「思想面」での断絶とは、山口精の「京城図書館」の設立目的が「参考図書の性格」<sup>17</sup>を備えていたことによる。『京城図書館概況』<sup>18</sup>には「本図書館ハ山口精ノ創立ニシテ初メ京城文庫ト称シ産業及ビ商工業調査ノ便ニ供スル目的ヲ以テ明治四十一年九月京城壽町日本人商業会議所内ニ創設」されたものであった。山口精の「京城図書館」は植民地朝鮮の産業振興のための図書館であり、明らかに李範昇や尹益善の思想とは異なる。

とは言え、思想的な問題はともかくとして、実際にはどのような継続性と断絶があったのであろうか。まず、山口精の図書館の状況について見ていく。参考にするのは、『京城図書館概況』である。『京城図書館概況』には、「蔵書類別表」「開館日数及閲覧人員表」「閲覧図書類別表」が掲げられており、図書館の状況が把握できる。「蔵書類別表」は次のようになっている。(別表1)

(別表1 蔵書類別表)

部門	類別	和漢書	洋書	計
一 門	神書、宗教	三八	六	四四
二 門	哲学、教育	三五〇		三五〇
三 門	文学、語学	六六七	七	六七四
四 門	歴史、伝記、地理、紀行	七三一	三	七三四
五 門	国家、法律、経済財政、社会、統計	九五二	二一	九七三
六 門	数学、理学、医学	一八九	四	一九三
七 門	工学、兵事、美術、諸芸、産業	六三九	二	六四一
八 門	類書、叢書、隨筆、雜書	一一、八一〇	一四五	一一、九五五
計		一五、三七八	一八九	一五、五六四

1916年(大正五年)時点での蔵書数は、15564冊になっている。「五 門」「七 門」の和漢書蔵書数に見られるように、実学の蔵書が多い。しかし、「三 門」の「文学、語学」の和漢書蔵書数が多いことも目を引く。なお、宇治郷論文では「1919年の閉館時、蔵書数は1万6千冊に達し」<sup>19</sup>とあるが、1916年(大正五年)時点で、すでに1万5千冊余りの蔵書がある。つまり、1916年以降、蔵書についてはあまり変化のなかったことが確認できる。

では、実際の閲覧状況はどのようになっていたのであろうか。『京城図書館概況』掲載の「閲覧図書類別表」(別表2)を参照し、「大正元年」から「大正四年」にかけての閲覧図書について確認する。



(別表2 閲覧図書類別表)<sup>20</sup>

類別	大正四年	大正三年	大正二年	大正元年
神書、宗教	五二	一〇	一八	二〇
哲学、教育	六三五	五四〇	五二〇	四四〇
文学、語学	一、一八七	八九四	八七一	八二一
歴史、伝記、地理、紀行	四、三九九	四、八七〇	四、九〇五	四、〇〇一
国家、法律、経済財政、 社会、統計	三、二〇八	三、〇六六	五、二二四	五、五八四
数学、理学、医学	六一八	一、〇一九	九四八	一、七五二
工学、兵事、美術、諸 芸、産業	二、七八六	二、三七一	二七〇	一二四
類書、叢書、隨筆、雑書	七、七五二	八、六七三	七、三九八	五、六八〇
計	二〇、六三七	二一、四四三	二〇、一五四	一八、四二二

実学にかかわる書籍の閲覧が多いのは当然のことであるが、「文学、語学」の閲覧の多いことが注目される。しかし、これは文学や語学への関心がもっぱら受験目的であったことによる。『京城図書館概況』の「三 概況」では、次のように説明している。

(前略) 今本館ノ状況ヲ見ルニ内地図書館トハ稍ヤ其趣キラ異ニシ入場者ノ多クハ悉ク直接眼前ノ必要ニ迫ラレ直ニ以テ之ヲ活用セントスルモノ、ミニシテ真ニ読書ニ趣味ヲ有シ之ヲ楽ミトシテ入場スル者甚少ナシ而シテ閲覧図書ノ種類ヲ見ルニ各種試験準備ニ要スル文学、語学、歴史、地理、法律等ヲ主トシ産業数学統計ニ次ギ其他経済財政商工等各方面ニ互リ殊ニ近時新案特許、鉱業等ニ関スル調査ヲ主トシテ入場スル者増加ノ傾向アルハ誠ニ善フヘキ現象ナリ

山口精の京城図書館は、設立の目的とはやや異なり、「各種試験準備」のために利用される傾向にあった。もっとも、「誠ニ善フヘキ現象」とあるように、工学や産業にかかわる書籍の利用は増加していることは、書籍の閲覧状況から確認できる。参考のため、「開館日数及閲覧人員表」(別表3)を参照しておく。

(別表3 開館日数及閲覧人員表)<sup>21</sup>

年別	開館日数	入場人員
大正元年	三〇五	六、六三四
同二年	二八七	六、七〇二
同三年	三〇七	六、六九五
同四年	三〇三	五、四二〇

1916年以降の図書利用状況については、推測するしかないが、蔵書の状況が変わらないことを考えれば、同じような利用状況だったのではないだろうか。なお、宇治郷論

文で指摘されていることであるが、『京城図書館概況』によれば「入場者ハ内地人八分 鮮人二分」であった。

先に見たように、山口精の京城図書館は、尹益善ら朝鮮人の手に渡り、やがて李範昇が運営するにいたる。単純化して言い直せば、日本人の京城図書館から朝鮮人の京城図書館へと変容する。その過程で、利用状況はどのように変わっていったのであろうか。この点については、残念ながら数値での確認はできない。しかしながら、『京城彙報』に掲載されているいくつかの記事から、利用状況をうかがうことができる。李範昇の「京城図書館と私」では、次のように記されている。

此頃は本館のみで一日入館者平均百八九名でありますが無料入館を許す時は一日三百人以上の閲覧者もありました、過去一ケ年の入館者が約四万人程あり出納書籍が七万卷程になります、書籍の都合上未だ貸出は致しませんが出来得る丈早く貸出制度を実行し度いと思つて居ります。

この記事が掲載されたのは1922年であるが、李範昇は、一年間の利用者数が4万人におよぶとする。1915年（大正四年）時点での山口精の京城図書館の入館者数はほぼ2万人である。先にも述べたように、1919年の閉館までに蔵書数が微増であったことを考えれば、山口精の京城図書館の利用状況にあまり変化はないと推測される。だとすれば、朝鮮人の運営する京城図書館は相当数の入館者を集めたのであり活況を呈していたことがわかる。

宇治郷論文では、1923年度の入館者について「全入館者数は70,606人」であり「このうち日本人利用者は5%強の4,040人にすぎなかった」<sup>22</sup>と述べている。朝鮮人のために設立された京城図書館の利用者は、李範昇や尹益善の目論見にそったものとなっていたことがわかる。

実際の利用状況について、『京城彙報』の記事から探してみたい。第八号（1922年6月）掲載の「京城図書館を見るの記」では、「此の日も学生らしき多数の鮮人と内地人の三四人を見受けたのである」とあり、朝鮮人学生の利用が多かったことをうかがわせる。また、第十七号（1923年3月）の「図書館事業界の片々」では「▲仁川図書館」には次のような興味深い記述がある。

仁川府立図書館に於ける二月中の閲覧者数は内地人百十一人鮮人九十九人（内地婦人四人鮮人婦人二人）で鮮人青年間には思想信仰方面のものが歓迎され内地人の方は趣味本意のものが喜ばれて居ると云ふことである。

地方の公立図書館では、朝鮮人の青年が通い、思想や宗教について知識を吸収しようとしていた。京城図書館でも同じ状況にあったと考えて間違いはあるまい。

朝鮮人のための図書館であった京城図書館は、李範昇や尹益善が願ったように、朝鮮人青年が知識を吸収し、独立への希望を繋ぐ場所であったと言い得るのではないだろうか。

### 【注】

- <sup>1</sup> 加藤一夫・河田いこひ・東條文規『日本の植民地図書館 アジアにおける日本近代図書館史』（社会評論社、2005年）、194頁。武断統治期における図書館については、本書の「第5章 朝鮮の図書館」に詳しい。
- <sup>2</sup> 『日本の植民地図書館 アジアにおける日本近代図書館史』、198頁。
- <sup>3</sup> 『参考書誌研究』第30号、1985年9月。宇治郷論文では、「2. 李範昇の図書館設立運動とその思想」において李範昇の思想について詳しく論じている。
- <sup>4</sup> 臨時号、1926年10月、大阪府立中央図書館所蔵のものを閲覧した。他の号においても同様である。
- <sup>5</sup> 『人文学報』、2013年、68頁
- <sup>6</sup> 『コリア研究』、2013年、86頁
- <sup>7</sup> 宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究—開化期から1920年代まで—」、20頁
- <sup>8</sup> 宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究—開化期から1920年代まで—」、9頁
- <sup>9</sup> 宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究—開化期から1920年代まで—」、15 - 16頁
- <sup>10</sup> 姜徳相編、一九七六年、みすず書房
- <sup>11</sup> 『現代史資料（25） 朝鮮（一） 三・一運動（一）』、284頁
- <sup>12</sup> 『現代史資料（25） 朝鮮（一） 三・一運動（一）』、XXX
- <sup>13</sup> 『現代史資料（25） 朝鮮（一） 三・一運動（一）』、286頁
- <sup>14</sup> 金成植『抗日 韓国学生運動史』（金学鉉訳、高麗書林、1974年）では、東京で留学生が行った「二・八独立宣言」と比較して、「二・八独立宣言書にくらべて極めて平和的であり、非闘争的であった」（81頁）と述べている。
- <sup>15</sup> 宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究—開化期から1920年代まで—」、15頁
- <sup>16</sup> 宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究—開化期から1920年代まで—」、15頁
- <sup>17</sup> 宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究—開化期から1920年代まで—」、6頁
- <sup>18</sup> 『京城図書館概況』については、宇治郷論文から知った。参照したのは、近代デジタルライブラリー（国立国会図書館）である。「大正五年八月」に山口精によって発行されている。
- <sup>19</sup> 宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究—開化期から1920年代まで—」、7頁
- <sup>20</sup> 「明治四十二年」から「明治四十四年」にかけては省いた。
- <sup>21</sup> 「明治四十二年」から「明治四十四年」にかけては省いた。
- <sup>22</sup> 宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究—開化期から1920年代まで—」、17頁

**付記** 本研究は学術振興会科研費（「基盤研究（C） 課題番号 25370255」 「研究課題名 文化政治前期の植民地朝鮮における図書館と〈翻訳〉 日韓文化交流史の再構築―」）の助成を受けている。